西浮通信

令和６年５月３１日
ＮＯ．３９２
東京都北区立西浮間小学校
校長　小島　みつる

「他 者 理 解 」の 力

校長　小島　みつる

東京都教育委員会では毎年６月、１１月、２月をふれあい（いじめ防止強化）月間として、いじめや不登校、暴力などの問題行動を未然に防止し、子供たちの健全育成を目指した取組みを行っています。本校では、日常的に生活指導部を中心に全教職員がいじめの未然防止や問題行動の早期発見・組織対応を意識して児童の指導に当たっていますが、特に６月のふれあい月間では次の取組みを行います。①みんながなかよくするためのアンケート　②アンケート結果による担任やこども安心サポーター・管理職からの聞き取り　③5年生全員のスクールカウンセラーとの個別面談　④いじめや情報モラルを題材にした道徳の授業　⑤よりよい人間関係形成力を育む学級活動の授業　等々　子供の思いを大切に受け止め、「いじめの芽」を見逃さず、そして「いじめを許さない心」を育てています。

とはいえ集団生活を営む上で、大なり小なりのトラブルは起こります。人が集まれば、楽しい和も絆も生まれますが、自分以外の感じ方・考え方をする人が集まっているのですから、大人社会同様子供にもトラブルが生まれるのは当然のことです。トラブルがないように配慮するのではなく、このトラブルを上手に乗り越える・解決する力を強めていくことが、いじめの芽を生まないために何よりも大切なことと考えます。

子供は「ぶたれた」「蹴られた」「嫌なこと言われた」などを訴えてきます。多分、ご家庭でもそのような訴えがあるかと思います。しかし、じっくり話を聞くと、先に手をだしたのは訴えてきた子であったり、通りすがりにぶつかってしまっただけでちゃんと「ごめんね」と言われていたり、「ろうかを走ってはいけないんだよ」と正当な注意をされていたのだったりすることも多くあります。では、この訴えてきた子がズルい気持ちで自分のことを棚に上げて、相手を責めているのかというとそうではなかったりもするのです。本当に「自分『だけ』が嫌な目にあった」と感じている場合も多いのです。

幼児は自分中心に世の中が存在していると思っています。自分とお母さん、自分と先生、自分と〇ちゃん、というように常に自分が中心です。年齢が上がり、いろいろな経験をする中で自分以外の人にも目が向くようになり、他者理解の力が高まり、自分以外の人の思いを想像できるようになり、思いやりの心が育ち、仲間をつくっていくことができるようになります。ところが、以前であれば１年生ぐらいではそろそろ自分以外の人の気持ちも考えられるようになっていたはずなのに、２年生になっても、３年生になっても（それ以上でも）、いつも自分中心で、自分以外の人の思いに気付けない子供がとても増えてきたように感じます。そのような子供はいつも「自分『だけ』が嫌な目に合う」と**本気**で感じており、年齢相応の友達をつくることができず、ますます不満や疎外感を感じ続けてしまうのです。さらに家庭でも子供の訴えだけを鵜呑みにして「うちの子『だけ』が…」といった対応をされていると、子供はますます他者理解ができないまま年齢を重ねてしまいます。いつまでも子供のままではいられないのですから、これはとてもとても不幸なことです。

私たちは、いじめを隠したり、誰か一方の味方をしたりすることは決してありません。いつも、全教職員で子供をみつめ情報交換をし、大好きな西浮間小の子供たち全員が楽しい学校生活を送り、幸せな未来をつかんでくれることを心から願って、日々教育活動を進めています。時には、担任から聞きたくないお小言を聞かされることもあるでしょうが、すべては子供たちのよりよい成長を願ってのことです。今年度は、これまで夏休み前に行っていた個人面談を９月中旬からに変更しました。でも、何か気になることがあれば、遠慮なくいつでもご相談ください。私たち大人も他者理解の力を高め、自分以外の人の思いを想像し合いながら子供たちのよりよい成長のために、手を携えてまいりましょう。